

国立妙高青少年自然の家 もうすぐ

20歳

今まで本当にありがとございました。これからもよろしくお願い致します。

国立妙高青少年自然の家は、平成三年に開所して以来、平成二十三年で、お陰様で創立二十周年を無事に迎えることになりました。

今日の国立妙高青少年自然の家があるのも、皆様の変わらぬご愛顧の賜物であると感謝しております。ありがとございました。

今号では、国立妙高青少年自然の家が開所してから二十周年を迎えることを記念して、

今までの国立妙高青少年自然の家の歩みをみなさんと振り返ってみてみたいと思います。

簡単に「二十周年」といいますが、「二十周年」を迎えるまでには様々な歴史がありました。

開所前

さて突然ですが、当時の妙高村（現：妙高市）が「少年自然の家」設置の誘致に動き始めたのはいつ頃だと思えますか？

正解は、昭和五十二年一月です。当時の上越支庁長と妙高村長で誘致することを確認したそうです。

この時を起点として、文部省（当時）の学制百年記念事業の一環として、国立第十四少年自然の家を新潟県中頸城郡妙高村（現：妙高市）に設置することに決定したのは、昭和五十四年十一月のことでした。

「昭和六十年一月」に建設の調査が入り、本館の基礎工事が開始したのは、「昭和六十三年十月」でした。

キャンプ場、スバルホールを除くすべての建物が完成したのは工事開始から何と四年の歳月をかけた「平成三年十月」のことでした。

平成3年度

この年の四月十二日に「国立妙高青少年自然の家（当時）機関設置」がされ、初代所長五十川隆夫氏をはじめ、十二名の職員でスタートを切りました。

国立妙高青少年自然の家にとって記念すべき最初の主催事業は「平成三年度雪国生活体験倶楽部」でした。平成三年十二月二十五日（水）から十二月二十八日（土）の三泊四日で六十三名の方が参加をしてくださいました。

平成4年度

この年に「サマーコンサートイン妙高」などの事業が行われ、十月十二日には「開所式」が挙行され、名実ともに妙高青少年自然の家はスタートしたのです。この年には他に主催事業は七つ開催し、いろいろなものの普及・発信を開始しました。この年にはキャンプ場の整備工事が始まりました。



「ありのままの自分」と「ありのままの友達」を見つけた妙高での日々



神奈川県横浜市立旭小学校
教諭（6年生担任）
清野 正康

子どもたちはもちろん、本校にとっても初の試みとなる『妙高長期宿泊体験学旅行（4泊5日）』を6月25日から6月29日にかけて実施しました。実施後の率直な感想としては、予想していた以上に子どもたちが充実した生活を送ることができ、4泊5日の長期宿泊体験学旅行に教育的意義を見出すことができたという事です。

4泊5日の生活を通して子どもたちに最も高めてほしいと考えていたもの、それは『自己有存在感』です。ともすると、自分と他人とを比べ、自信をもって自己を表現することを躊躇してしまう子どもも少なくない思春期の入口にいる6年生の子どもたち。この時期の子どもたちにとって、『自己有存在感』は、人と人との関係の中で自己を表現し、よりよい人間関係を築いていく上での土台となるものと考えます。そして、この時期の子どもたちだからこそ、自己及び友達との関係をしっかりと見つめることができる、見つめる意味があると考え、本校では6年生での実施に踏み切りました。

4泊5日、親元を遠く離れ、友達と共に生活するという『不安・緊張』。2泊3日までの経験しかない子どもたちにとって、2泊目以降は未知の領域。『ありのままの自分』と『ありのままの友達』との間で、折り合いをつけながら生活する経験は、多くの葛藤を生み出しました。そして、毎日の振り返りの時間には、その葛藤を言葉にして友達と共有しました。この振り返りこそが4泊5日で最も大切にしていた時間であり、子どもたち一人一人にとって、学級全体にとってこの上ない充実した時間でした。日を追うごとに友達への感謝の言葉が増え、学級の雰囲気がかほりかとしていくのを感じました。

このような充実した振り返りの背景となったものは、やはり充実した活動です。都市部で生活している子どもたちにとって、『源流探検』『野外炊飯』『キャンプファイヤー』等々、自然豊かな環境で活動すること自体が驚きと発見の連続であり、楽しくて仕方のない毎日でした。加えて、国立妙高青少年自然の家の全ての活



平成5～8年度

平成五年には、「サマーコンサートイン妙高」が、MYOKO音楽祭となり平成九年まで行われました。また、スバルホール、第二駐車場の工事が開始となり平成六年に完成しました。平成七年には第二野外炊事場が完成し、坪岳ハイキングコースが開設されました。平成八年には、ふれあい棟の工事が始まり、参議院文教委員会の視察がありました。

平成9年度

この年には、ふれあい棟完成、仲間づくりの森（プロジェクトアドベンチャー、フィールドアスレチック）が完成しました。そして、「妙高・キッズアドベンチャー」が始まり多くの小学生たちが一週間以上の長期宿泊体験活動を行いました。

平成10年度

七月には、「国際青年の村98」が自然の家を会場として開催されたため、紀宮様が活動の御視察にお成りになりました。

主催事業としては、「妙高ふれあいスクール」、「MYOKO音楽祭」が、「MYOKO光と風のフェスティバル」になり、自然体験活動担当教員研修会が行われました。

平成11年度

平成十一年には、「妙高ふれあいスクール」が「はつらつ体験塾」と名称が変わり、今現在まで行われています。

「妙高自然の家ボランティア養成講習会」、「プロジェクトアドベンチャー指導者講習会」などの事業が始まりました。

平成12年度

平成十二年には、「自然体験活動担当者プログラム作成研修会」、「野外教育企画担当者セミナー」などが開催され、自然体験活動の素晴らしさ、技術などを全国に発信しました。

三月には、プレイホールに「室内プロジェクトアドベンチャー」が完成し、炭焼き広場を開設し、様々なプログラムが可能になり幅がますます広がりました。

平成13年度

平成十三年四月一日をもって、文部科学省から、国立青少年教育三施設が独立行政法人に移行し、この名称も「独立行政法人国立青少年自然の家国立妙高少年自然の家」に変更となりました。そして、七月十三日に利用者数延べ百万人を達成いたしました。

また、この年で開所十周年を迎え、記念式典を行いました。多くの方々に祝福をしていただきました。



動の根底には、「思いやりのリレー」の精神が流れています。「一緒に活動する仲間への思いやり」、「次にその活動をする人への思いやり」等々、常に「思いやりのリレー」を合言葉に過ごした4泊5日は、子どもたちの優しさを十分に引き出し、実践へと促してくれました。学校に帰ってきたときの子どもたちは、疲れてはいないものの、何かをやり遂げた清々しい表情でいっぱいでした。

本校にとって、国立妙高青少年自然の家での生活は、ねらい通りに子どもたちの心を十分に耕し、「自己有用感」につながる経験を積むことにつながりました。計画から実施まで親身になって関わってくださった職員の皆様にも心より感謝いたします。

国立妙高青少年自然の家への思い 「妙高というフィールド、 そして施設への愛着」



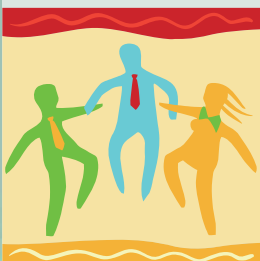
至学館大学健康科学部 時安 和行

大学で野外運動を専攻し、同時に未熟ながらも競技スキー部で活動した。その時から妙高というフィールドとの関わりが始まった。スキー部の合宿が夏冬とも妙高で多く実施され、特に夏の池ノ平から野尻湖を一周し池ノ平に戻ってくる30km以上のランニングは今でも忘れられない。フワフワな私に監督が給水を渡すときの励ましと笑顔、そして背景の妙高の自然は鮮明に覚えている。

1980年代後半の秋、野外運動研究室で先生方や大学院生が国立の少年自然の家に併設されるキャンプ場のレイアウトについての検討が始まった。それが「妙高」だと知り、「夏も冬もダイナミックな自然体験活動ができる妙高なんて最高だな・・・」といった妙高で活動し働いてみたいという期待と夢を持ったことを思い出す。その約10年後に、妙高ではないが国立青少年教育施設職員として働き始め、何回か国立妙高少年自然の家に足を運び、アクティビティ指導を勉強し楽しんだ。いつ来ても職員が自然を愛する気持ちと指導への熱意を感じて施設を後にした。

現在は勤務する至学館大学で夏冬の実習でキャンプ場を利用させていただき10年近く経つ。キャンプセンターや野外炊飯棟からテントまでの道のりを「疲れた」「暗くて怖い」という言葉が多く、テントが遠い、めんどくさい」と言っていた学生が、火打山登山や笹ヶ峰トレッキングの後にキャンプ場に帰ってくる。「帰ってきたよー！」「たたいまー！」と大きな声で学生が叫ぶ。テントに、キャンプ場に、国立妙高青少年自然の家に愛着を持った瞬間である。学生の中には実習後にボランティアに参加する学生もいる。学生は「帰ってきたよー！」「たたいまー！」と言っているだろう。

主催事業や研究テーマの改善は大いに結構であるが、いつ来ても変わって欲しいくないこともある。それは、国立妙高青少年自然の家にある自然の優しさである。そして満面の笑顔で受け入れてくれる職員の暖かさである。再度訪れた人が「また来たよー！ たたいまー！」という言葉に大きな声で「お帰りなさい！」と応えてくれる施設であって欲しい。次回利用させていただくときは学生に習って、ちょっと恥ずかしい気もするが、職員の方々に大きな声で「たたいまー！」と声をかけてみようかと思う。



平成14年度

この年、悩みをかかえた青少年を対象とした体験活動推進事業の一環として中学生を対象として「オープン・ザ・ドア」がスタートしました。

これは、悩みを抱える中学生を二十泊以上の長期に渡る生活体験・冒険活動に取り組ませると共に、マウンテンバイク等で日本縦断していくという圧倒的な達成感を与えることによって自己の生活を振り返らせ、社会性や自信の回復、自立心等を育てることをねらいとして行われました。

平成15年度

この年の主な主催事業として「MYOKOプログラム体験会」が始まりました。

これは、地域の指導者、幼稚園・学校の教職員利用団体の指導者を対象に、自然の家が持つ魅力あるプログラムを体験し、指導力の向上を図るために行われました。

平成16年度

主な事業として、問題行動、不登校等の現代的課題を抱える青少年に絶えず接している保護者等を対象に「心のセミナー」～悩める親たちのためのサポートキャンプ」を四回開催し、青少年との関わり方や家庭・学校・地域社会との連携の在り方を探求し改善を図る趣旨で開催されました。

平成17年度

この年から「MYOKO活動プログラム体験会」が年に四回になりました。野外炊事で昼食を作ったり、妙高アドベンチャープログラムや環境学習を体験したり、ハイキングコースなどの実地踏査をしました。

最終年度となった「オープン・ザ・ドア」も太平洋から日本海へ」が実施され、全国に成果が報告されました。

平成18年度

この年は、国立青少年教育3施設（独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター・独立行政法人国立青年の家・独立行政法人国立青少年自然の家）の発展的統合ということで独立行政法人国立青少年教育振興機構が発足し、「国立妙高青少年自然の家」が誕生しました。

全国の小学校四年生、六年生二十四名を対象に十四泊十五日の長期キャンプ・キャンプとお手伝いの旅」やらせから自立へ」がスタートし平成二十年まで行いました。

平成19年度

この年は、「長期宿泊体験活動における『生きる力』再生プロジェクト」として、「妙高フレンドスクール」通学キャンプ」に替わり、妙高市内の小学校五校の六年生約百名が六泊七日の日程で宿泊する「妙高フレンド



自ら見つける力 自ら考える力 自ら行動する力

私たちは千葉県でサッカークラブチームとして小学生・中学生を指導している団体です。そのスポーツの大好きな子供たちに基礎学習能力の定着も狙い、簡易学習塾も開いています。そして子供たちの心身ともにグローバルな成長を狙っています。国立妙高青少年自然の家は4年前からの利用です。夏休みには中学生7泊8日と出来る限り長期日程合宿で利用させていただいています。通常スポーツクラブの合宿という単一スポーツを強い負荷をかけたトレーニングするものが多い中、この国立妙高青少年自然の家では、サッカーだけにとらわれず、心の成長を狙った合宿となるよう計画しています。合宿中はもちろん携帯電話は一括管理、ゲーム機も利用禁止。しかし、集団で遊ぶ遊具は大歓迎。集団スポーツでは仲間とのコミュニケーション能力が絶対必要であると考えています。妙高アドベンチャーによる仲間との協力による達成感の習得。自炊も4回以上経験。役割分担された各自の責任と協力。最終日には妙高山登山。麓では気楽な会話だった声も徐々に、「ここは滑るぞあ」、「鎖場は手を離さなければ安全だぞあ」、わかりきった事でも復唱。とても大きな成長と感じています。



千葉県
順蹴フットボール
アカデミー 代表
三戸 康裕

ある時、トイレのスリッパが次の人がすぐ履ける向きに置かれるようになりました。コーチの指導は「トイレを使った後便器が汚れていたら次の人の事を考えてきれいにふき取ってから出なさい。」だったのですが、スリッパまで次の人の事を考えて脱ぐようになるとは、合宿の狙いと言えは狙いですが、非常にうれしく感じ子供たちの心の成長を確信した時でした。

思春期という中学生年代、体の変化も考え方の変化も一生のうちでここまで変化する年代は二度とありません。その最も大事な時期にこそ、怒られ怒鳴られ行動するのではなく、自ら考え見つけ出し進んでしかも楽しく行動する力を身につけてほしいと思っています。サッカーの試合もベンチで怒鳴ることはありません。ピッチに立ったら自分の責任で戦わなくてはなりません。その責任をしっかりと果たすためにトレーニングがあります。この妙高自然の家での体験は、サッカーはもちろん今後の生活でも必ず大きく役に立つことでしょう。

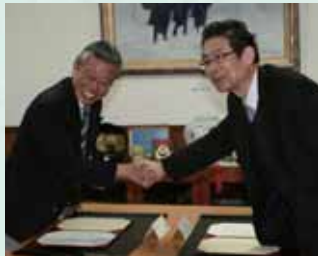
「出逢いは人生を変える」



国立妙高青少年自然の家
法人ボランティア
及川 未希生

やっぱりこの言葉から始めようと思います。正直に言うと、この原稿を書きながらすごく悩んでいます。本当にたたくさんのオモイが溢れてきて、本当に素敵な出逢いがありすぎて、とてもじゃないけどまとめられない!! たった一つの出来事で、原稿用紙が溢れかえってしまいそう、いったい何を書けばいいのやら? と思っている私がいいます。

でも同時に、この「妙高」ともに歩んできた日々が、言葉では語りつくせないほどのとても大きな「オモイ」を心に刻んでくれたんだなあと思うと、なんだか嬉しい気持ちになります。もういつそこのまま何一つ具体的なことを書かなくてもいいのかなあ、なんて思ったりもします。でも一つくらいは書くことが。4年前初めて参加した主催事業は、キャンプとお手伝いの旅」でした。そのキャ



キャンプ・友情・笑顔・自立の一週間」が開催されました。

また、更なる連携・協力を図るために国立大学法人上越教育大学と協定書を交わしました。

平成20年度

「キャンプとお手伝いの旅」やらせから自立へ」が三年目を迎え、研究成果を全国に普及・発信しました。

また、長期宿泊体験活動のより一層の推進を図るため「豊かな体験活動推進フォーラム」が始まりました。

そして、妙高市と協定書を交わり、更なる連携・協力を深めることとなりました。

平成21年度

この年から、次代を担うリーダーの育成を目的とした「妙高ジュニアアドベンチャー」九」が行われました。

ここでは、困難に立ち向かおうとする力 自ら考え行動する力 創造力を働かせ工夫して課題を解決しようとする力 集団を目的やねらいへ導こうとする力 集団内の人間関係をより円滑にしようとする力を青少年のリーダー性を特定する要素として絞り込み、実証していくために行いました。カヌーで佐渡海峡横断し、マウンテンバイクで佐渡島一周するなど、子どもは次々と困難な状況をクリアしていききました。

十月二十四日、十月二十五日に、豊かな体験活動推進フォーラム」が開催されました。このフォーラムの特別講演会では、千葉県知事・森田健作氏をお招きし、「早ね早おき朝ごはんで拓く子どもたちの未来」で講演していただきました。

平成22年度

「妙高ジュニアアドベンチャー」が、七月二十五日、八月八日十四泊十五日で、今度は「信濃川全三六七kmをMTBによるサイクリング、Eポート、手作りいかだで、河口まで下る長期キャンプを行いました。また、十月三日に「国立妙高青少年自然の家 感謝祭」を開催しました。

いよいよ平成二十三年度に、国立妙高青少年自然の家は創立二十周年を迎えます。これからも皆様に「愛顧いただけるように職員一同これからも「さわやかあいさつ 心のえがお」を忘れずに全力で取り組んでまいります。

これからも国立妙高青少年自然の家をよろしくお願いいたします。



ンプで一緒にキャンプカウンセラーをした親友と久しぶりに話す機会がありました。お互い夢中になるくらい思い出話に花が咲き、何時間も話が尽きない中で、親友がこんなことを言っていました。

「たくさん泣いたし、笑ったし！今、振り返ってみるとさ、あの16日間のキャンプが私たちの「原点」で、あの時「人生」変わったよね！」

私も心の底からそう思います。まぎれもなく私の出発点だったし、今も強烈なおモイとして心に響いています。いつか自分もこんなキャンプをしてみたい、子どもたちを感動させたい、あなたのオモイをカタチにしたい、夢追うための原動力です！

この妙高でたくさん仲間と出逢い、たくさん子どもたちと出逢い、たくさんのおモイ、と出逢うことが出来ました。妙高の門を叩いて本当に良かった！まさに感謝感激雨降です！

私の妙高で過ごした日々がそうであったように、この場所での体験の一つ一つが、いつも誰かの出発点であり、同時に初心に帰れる場所であってほしいと思います。きっとそんな「体験」に出逢えたなら、その瞬間あなたの人生も変わります！！

「人」が作る、人のための妙高青少年自然の家



上越教育大学
施設マネジメント課
元国立妙高青少年自然の家職員
秋山 洋

初めてこの妙高に来た時のことを思い出します。平成8年3月。スーツ姿で新境地として引き継ぎに来た日でした。春の陽気の中、玄関前の4mもあろうかという雪の山に圧倒されました。あれから14年、私は今も妙高の魅力に取りつかれています。なぜ妙高はこんなに魅力的なんでしょう。

私は2期6年を妙高で勤務させていただきましたが、自然の中で体を動かすこと、作業がこんなにも楽しいこと、元気を与えてくれるものだと妙高に来るまでは思いませんでした。時間があれば外作業をしていたものです。点検・整備が目的ではあるけれど、そこに息づく木々・植物・動物・昆虫・土・雪・空気あらゆるものを全身で感じるためでもあったし、自身が元気をもらいつつも、作業することで体験活動に訪れる人達の感動に繋がっていることが嬉しくてたまらなかったのを覚えています。

そんな妙高に集まる人たちの繋がりも魅力の一つです。利用の皆様からの「また来ましたよ！」といった言葉、事業参加者・ボランティアスタッフとの交流、以前の事業参加の子どもが大学生リーダーとなって訪ねてきてくれたこともありました。ここに来ると懐かしい顔に会える、元気になる。そう思ってくださいる人がいることは妙高にとって宝だと思います。

妙高で働くスタッフも素晴らしい人ばかりです。もはや「労働」感覚はなく芸術家が開発者に近いような感覚、子ども達に感動を与える「自然の家」という作品をみんなで工夫し、悩み、討論し、様々な思いを重ねて形にしてきた作品が今の妙高なんだろうと思います。完成形としての終わりがなく、成長し続けていく生き物のような作品。

いつまでも、雄大な妙高山の麓、変わらない自然の中で、人が作り、人に生きる力と感動を与え続けられる、成長し続ける「妙高」であることを願っています。

